

平成十九年三月

蟹江市歴史民俗資料館

年報

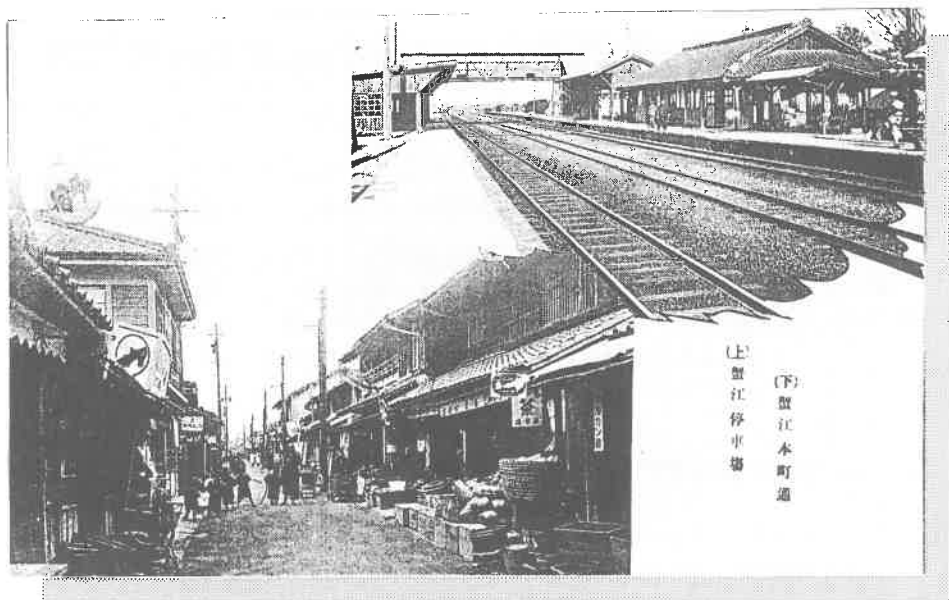
第二十七冊

目次

一	「沿革誌」より	1
二	事業概要	2
三	資料の収集・保管	3
四	展 示	12
五	調査・研究	16
六	情報提供	18
七	教育普及	19
八	庶務報告	28
九	文化財保護	29

蟹江町歴史民俗資料館特別展示

鉄道開通110年のあゆみ



蟹江絵葉書（昭和12年）より

平成17年11月5日（土）～12月4日（日）

（月曜・祝日休館） AM9:00～PM5:00 入 場 無 料

場 所 蟹江町産業文化会館 1階 企画展示室
（蟹江町大字今字蟹江浦23番地4）

主 催 蟹 江 町 教 育 委 員 会

問い合わせ先 生涯学習課歴史民俗係（歴史民俗資料館）

0 5 6 7 - 9 5 - 3 8 1 2

特別展開催にあたり

蟹江町に初めて鉄道が通ったのは、現JR関西本線の蟹江駅が開業した明治28年(1895)5月24日、名古屋・前ヶ須(現弥富)間の開通時でした。これは明治21年(1888)3月に創立された関西鉄道株式会社が名古屋・大阪間の路線敷設を試み、草津・四日市、さらに四日市・桑名と進んだあと敷設されたものでした。路線の敷設に際して、関西鉄道は津島を經由して名古屋に進出するルートと、蟹江を直進し、名古屋へ至るルートの2案を策定していた模様です。

両ルートはそれぞれ「蟹江線」及び「津島線」と称され、沿線各地の利害も絡んで複雑な誘致・反対運動が展開されました。

結局、明治27年(1894)1月15日の東京において「蟹江線」が正式なルートとして決定されて本格的な工事が始まりましたが、もともとこの一帯は日本有数の水郷地帯であり、南北に河川が流れている所へ、東西に横断するような路線を建設するため、数多くの築堤や橋梁を築く必要があるため膨大な経費を必要とし、沿線地域からは河川や用悪水の流れの妨げにならないようにとの強い要望が出たため折衝に手間取り、難工事の連続だったようです。現在、蟹江町や弥富町に残されている関西本線建設に関する文書においてもうかがい知ることができます。こうして約1年間で線路は開通し、蟹江駅は当時の繁華街から外れた田圃のど真ん中に設置され、蟹江停車場(ステーション)と称されて、海部郡の玄関口として機能することとなりました。

鉄道の開通は、近世以来、水運に頼ってきた当地方の生活スタイルを大きく変革させ、蟹江停車場の周辺には、旅館や商店を営む多くの新住民が移り住み商店街が形成されるようになりました。

蟹江町内のもう一つの鉄道駅である近鉄蟹江駅の設置は、昭和13年(1938)6月26日、近鉄の前身である関西急行電鉄が名古屋・桑名間を開通させた時に、蟹江本町地区に設置したものでした。毎時、便利な電車を多く走らせたことから、やがて関西本線を凌駕するようになり、付近にも多くの商店が建ち並ぶようになって、町内一の繁華街が形成されることとなりました。

当町を横断する鉄道開通から約110年を迎えて、両鉄道の歴史とその歩みをテーマとしてここに特別展を開催する次第です。

なお、特別展開催にあたり、同館の開催趣旨をご理解いただき、資料及び情報提供などご協力をいただきました方々に対しまして、ここにお礼申し上げる次第です。

平成17年11月吉日

蟹江町歴史民俗資料館

鉄道開通110年の歴史

1 関西鉄道の設立

蟹江町に初めて鉄道が通ったのは、明治28年(1895)5月現関西本線の名古屋・前ヶ須(現弥富)間が開通した際であった。

関西本線(名古屋一湊町)の前身は、関西(かんせい)鉄道と大阪鉄道という私設鉄道であった。明治13年(1880)京都・大津間に官設鉄道(東海道線)が開通し、16年(1883)以降、長浜以東が開通した後も、長浜・大津間は琵琶湖の船運によってなされていたが、この区間の地元有志達が独自に大津・名古屋間の鉄道建設を考え、四日市を經由して名古屋へ至る路線を計画したことによる。

同時期、旧東海道に属しながら、主に軍事的な理由で東海道線建設が関ヶ原経由となり路線から外れることになった三重県側においても同様の計画が有力者を中心に立案されていた。

ここに至り両県知事が、関係者を説得。明治20年(1887)3月30日東京府華族井伊直憲ほか10人が発起人となり、滋賀・三重両県知事を通じて政府へ関西鉄道株式会社の創立請願書を提出した。

計画の内容は、大津・四日市間の鉄道建設以後、四日市・熱田及び京都・奈良は将来建設するというものであった。

これに対して政府は、四日市・熱田間においては、木曾・揖斐川を始めとする大河川があり、鉄道建設の成功は甚だ疑問であること、計画路線で大阪鉄道と競合する部分があること、完成後官設鉄道と競合する路線となることから、起点を大津から草津へと変更し、大阪鉄道と協議の上、再度願書の提出を命じた。

関西・大阪鉄道会社の発起人は滋賀・三重両県知事の通達によりその建設区域について協議したが、協議は容易にまとまらなかった。

そこで鉄道局長官の裁定により、両社は互いに譲歩することになり、関西鉄道は草津～四日市、四日市～桑名、河原田～津間の建設を、大阪鉄道会社は奈良・桜井間及び北今市～奈良間の鉄道建設を出願することとなり、明治21年(1888)1月23日、関西鉄道会社創立委員総代木村誓太郎・谷元道之の二人は、指令に従い改めて会社創立の請願書を提出した。政府は鉄道局長官の意見を徴した上、3月1日、関西鉄道会社に対して免許を下付した。同日同社創立委員は、直ちに社長に前島密を選び、資本金300万円で関西鉄道会社を設立し、本社を三重県四日市町においた。

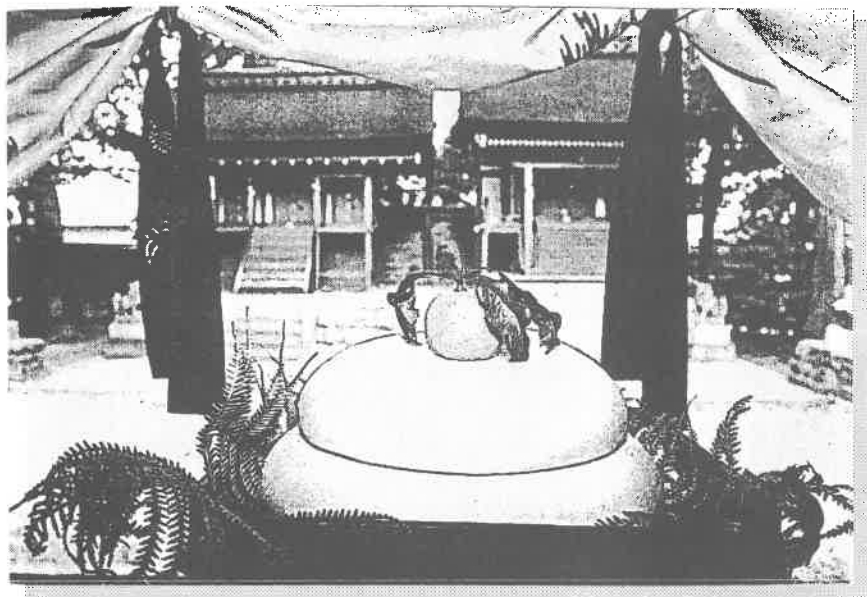
蟹江町歴史民俗資料館特別展示

「お正月」

平成18年1月29日(日)～2月26日(日)

(月曜・祝日休館) AM9:00～PM5:00

場所 蟹江町産業文化会館(歴史民俗資料館) 1階 企画展示室



富吉建速神社・八剱社祭文殿内 撮影:加藤俊男氏

●講演会● 「雑煮の地域性」

2月12日(日) PM1:30～3:30 蟹江町産業文化会館 3階会議室
講師 鈴鹿国際大学名誉教授・農学博士 水谷令子先生

主催 蟹江町教育委員会

問い合わせ先 生涯学習課歴史民俗係(歴史民俗資料館)

TEL/FAX 0567-95-3812

開催にあたって

日本の年中行事の中で、「お正月」というと、日本人にとって一番重要な行事であると言っても過言はないでしょう。「もういくつ寝るとお正月…」という歌もあるように、皆お正月が近づくと待ち遠しく思い、また、正月を無事迎えらるるようにと準備に追われます。

「お正月」と一言でいいますが、もちつき、門松、初詣、正月料理、正月ならではの遊びなど、そのなかには様々な行事や風習があり、今に受け継がれています。そのような行事や風習にはどんな意味があり、そして地域の特徴があるのでしょうか。

今回の特別展では、蟹江町内でおこなわれるお正月ならではの行事や関連資料を中心に紹介し、その意味や地域性を探ってみようと思います。

なお、今回の特別展開催に際して、ご協力いただきました志治辰雄様、須成敬神会の皆様、法応寺および檀家の皆様、蟹江新町日吉神社氏子の皆様を始めとした多くの関係各位にご協力をいただきました。ここに厚く感謝申し上げます。

平成18年1月吉日

蟹江町歴史民俗資料館

1 お正月とは

日本人にとってなぜお正月は重要なのでしょうか。それは、ただ単に一年の始まりだから、というだけではなく、そこには大きな意味があるからなのです。

昔、現在のような暦がなかった時代は、一年の始め＝春のはじめでした。生命が芽吹く春が訪れた、というところから正月は「芽出度い＝めでたい」とされ、祝うようになったといえます。迎春、新春などというのは名残だと思われま

す。正月には、年神という神様が山から降りてくるといわれています。年神は高い山から里に降りてきて一年の実りと幸福をもたらしてくれる存在で、人々は年神を迎えるために年末から準備に追われ、正月を迎えるのです。年神は、祖先の神様であり、穀物の神様であるとされます。お正月に家族で墓参りに行く家庭が多

2 正月準備

暦では、12月13日を「事始め」といい、正月の準備を始める日とされています。しかし、正月準備をはじめる時期は地域によって違いがあり、蟹江でもかなり早くから準備にかかる地域もあります。

◆しめなわ作り

蟹江町の北部の須成地区では、毎年11月の第2日曜日にしめなわ作りが行われます。この日は、富吉建速神社・八剱社の境内に敬神会の役員が集まり、当神社はもちろん、須成の字内の各神社のしめなわが作られます。

材料は、地元の田んぼでしめなわ用に栽培した餅米のわらで、8月の始め、穂が出る前に刈り取り乾

燥させ、青さが残るように暗いところで保管しておいたものが使われます。

20数名が集まり、地元の名人に手ほどきを受けながらしめなわを完成させます。この時作るしめなわは、「大根じめ」という、大根のように太くて先に向かって細くなっていく形のもので、各神社の正面に飾るものが手分けして作られます。太いので、2～3人がかりで仕上げることもあります。このときには同時にしめなわに垂らすしめの子や、拝殿や賽銭箱の周りに張る縄、そして須成祭で使用する縄も作られます。作られたしめなわは、箱に入れて年末まで保管され、12月30日の大祓えの神事後に古いものと付け替えられます。